

佳作

墨で字を書くということ

宮城県登米市立登米中学校

3年 米谷 日和

硯に墨汁を垂らす。黒々した墨を静かにする。部屋の中に墨のいい香りが広がっていく。私の心の中が静まり、とても落ち着く瞬間である。筆をしっかりと握り、穂先を硯の中に沈める。正座している私はしっかりと座り直し、深呼吸した後、一気に書き始めた。

今日の課題は「風流韻事」。一字一字集中して気持ちを入れて書いていく。書き終えた作品に納得がいかず、もう1枚、もう1枚と次々と書き続けた。やっと、自分が思い描く作品へとたどり着く。横を見れば数え切れないほど試行錯誤を繰り返した紙が積み重なっていた。先生に確認していただき、気持ちを切りささないまま名前を書いてやっと1枚が完成する。

私が習字を始めてもう7年がたった。始めたのが小学校2年生の頃で、私よりも1年早く習っていた姉がいるからというのがきっかけだった。集中力がなくてすぐに諦めてしまうような性格の私は、どうせこの習字もすぐにやめてしまうんだろうなと思った。初めて筆を持って字を書いた日は手も服も墨で真っ黒になって大変だった。書き上げた作品も字の周りが墨で汚れ、私はもうすでに習字が嫌になった。服は汚れるし、うまく筆を使いこなせないし、教室で習っている人のようにうまく書けるわけがないと決めつけていた。

それから家に帰り、母に愚痴を言った。

母は私に言ってくれた。

「そんなにすぐ上手に書けるわけないよ。何か一つでも長く続けてみなさい。集中力も身に付くし絶対役立つ時があるから。」

私はその言葉を信じ、本気で習字をやると決めた。それからどんどん級が上がっていき、小学4年生で段になった。段になってからは審査も厳しくなり、次々と階段を上がることができなくなった。しかし、私は諦めずに習字と向き合い続けた。そして、中学2年生になり、5段まで上がることもできた。

中学2年生の時だった。習字教室の先生から模範級の試験を受けてみないかと声をかけられた。模範級は学生部でも一番上の階級だった。そのため、審査も今までとは比にならないくらい厳しく、一発で受かる人はあまりいないと言われた。私は落ちてしまうのが怖く、受けるか迷っていた。しかし、自分がこれまで身に付けた技術が無駄にしてはいけないと思い、試験を受けることにした。

模範級の試験は今まで書いていた半紙ではなく、いつもより長い長半紙だった。あまり書き慣れていないため不安だったが、やると決めたからにはやるしかないと思い、一気に書き始めた。試験のお題は「晴耕雨読」。いつもと違う紙で墨がにじみやすく、力加減にたいそう気を遣った。しかし、いつもどおり気持ちを入れて書くことができた。作品を完成させるまでには4日ほどしかなかった。ここでくじけてはいけないと思い、集中して黙々と私は書き続けた。

4日たち、それまでに書いた中から3枚を選び、さらにその中から審査に出す作品を1点選んで提出した。それから2週間後の土曜日。突然、家の電話が鳴った。電話に出た母が何やら驚いたように話していた。電話が終わり、母が言った。

「日和！ 模範級、合格だってよ！」

そう言われて私は本当にうれしかった。心の底から喜びがあふれ、ガッツポーズが出た。

次の習字の練習日。私がいつものように教室の扉を開けると、目の前には試験の合格者の名前が張り出されていた。私は自分の名前を探した。

「模範級 合格 米谷日和」

この文字を見て、やはり合格したんだと確認し、安心した。習字を習っていて一番うれしかった瞬間だった。

私には習字を7年間習っていて学んだことがたくさんある。最初はやりたくないと思っていた私でも、こんなに本気になって集中して続けていくことで絶対に結果は付いてくるということを改めて実感できた。そして、なにか新しいことにチャレンジすることで得られる達成感が感じられた。「継続は力なり」という言葉のとおり、毎日学びを続けること、できなかった所を繰り返し復習すること、そうすることで、人は確実に力を付けることができるのだと改めて実感した。私は筆を持つことで自分の世界が広がり、墨で字を書く素晴らしさを知ることができた。「まず、やってみよう」「チャレンジしてみよう」という気持ちをこれからも持ち続けて生活していきたい。そして、新たな出会い、学びを大切にしていきたい。